アブケン

福田浩尚

高校時代の仲間どうしのサイトがあっていつも楽しくメールを交換している。盛岡市にある高校で、方言についての話題には事欠かない。岩手県は日本一面積が広いので同じ県内でありながら微妙に言葉が違っていることもある。お互いに知識をひけらかしたりするのも中々楽しい。

そのなかで、ある女性のメル友が、「ランチバゾウ」という言葉を知っているかと書いてきた。小さい頃、父親がよく言ってたそうで部屋のなかが散らかっているという意味らしいというのだ。私自身も方言については一家言がある。しかし、どうもこの方言にはお目にかかったことがない。他の友達も分からないという。そのメル友も、ちょっと困ってしまって、父親は中国に結構長くいたのであるいは中国語からかも知れないということになった。そこで、私も、ここであきらめては男の立つ瀬がないと滅多に使わない中国語の辞典を引っ張り出して調べた。たしかに「ラン」の発音は「乱」を思い出させ部屋などが乱雑になってる状況を連想させる。乱の項を調べると「乱粉粉（luanfenfen）」という表現があって、これはひどく乱れているさまに使うらしい。しかし「ランチバゾウ」とはかけ離れていてどうもこれではないらしい。つまり、ここまでが私の限界だった。

そんな折、文芸春秋新年特別号を読んでいたら、向田邦子の文章に出会った。創刊90周年記念号と題して記念に残るエッセイを特集したものの中に「ツルチック」という題名で昭和50年6月号に掲載されたものである。向田さんは、小学校6年生のときに父親と飲んだ飲料の味があまりにおいしくて忘れられないという。父はその飲料の名を「ツルチック」と教えてくれた。成長してからもその味を忘れられず折に触れて訊くのだが誰もそんなものは知らないという。向田さんの父もこのエッセイを書いた5年前になくなったそうだ。そのあとも母親に訊いても記憶にないという。向田さんは、ご存知の如く、飛行機事故で亡くなられた。結局、永久に分からずじまいということになった。

実は、私自身にも似たような経験がある。それは「アブケン」という名である。小さい頃、母親に「アブケン」を食べたいと言って困ら

せたという。「アブケン」とは何か。母が色々な食べ物を見せて試した結果どうやら豆、それもいんげんの煮豆だということが分かったというのである。なぜ、いんげん豆が「アブケン」なのか。訊かれても答えようがない。だが、私にとっては「アブケン」といえば砂糖と煮込んだ豆が連想される。似たような経験と言ったのは、人間の脳の中には実際の名前と違ったものがイメージとして記憶されていることがあるらしいという事だ。幼いころ、なにかで得たイメージが記憶として残っているらしい。

以上のことを一「ツルチック」や「アブケン」のことを一文にして、私たちのサイトに投稿した。そのあと、よく考えると、「ツルチック」、「ランチバゾウ」に対する私の見方はやや一方的ではなかろうかと思った(ともすれば架空の言葉と断定しているように受け取れる)。

向田さんはともかく、我がメル友がそれを読んだら気分を害したのではなかろうか。気になった(女性に対して特に気を使うのは私の性格である)。

ところが、ほどなく問題は解決を見た。同じメール仲間が、中国語の辞書を調べてついに突きとめたのである。この人は私なんかよりずっと中国語ができ、詳しく辞書を調べてくれたらしい。

「乱七八糟」と書いて luan qiba zao と読む。意味はめちゃくちゃである、ひどく混乱しているさま、とある。そうだ、これに間違いない。女性のメル友は喜んだことこの上ない。父親が幼いとき教えてくれた言葉がやっぱり嘘ではなかった。父とのなつかしい思い出によほど嬉しかったに違いない。あんまり嬉しくて、「夜も眠れないほどでした」と書いてきた。こちらは、「安心してゆっくり眠れました」と返事をしておいた。

終わり

2013年2月